

Study on influence that Comprehensive Community Sports Club gives a feeling of reason for being to the elderly person

1 K 0 8 B 8 0 1 - 9 清水 隆太郎

指導教員 主査：間野義之教授

副査：葛西順一教授

1. 研究背景

近年の我が国の国家的課題の一つとして高齢化問題が存在する。総務省統計局人口推計によると、平成 21 年 10 月の時点の日本の総人口は約 1 億 2751 万人で平成 16 年の約 1 億 2778 万人から徐々に減少してきている。

総務省統計局の予測によると 2055 年には日本の人口が 9000 万人を割り込み 40%以上が高齢者という極端な高齢社会が到来する。今後高齢者の数が増え続けるということは、高齢者の生活を支える社会システムも同じくして増えていくと考えられる。現在では年齢を問わず 1 人暮らしの世帯が非常に増えており、人間関係が希薄になっているのが日本社会の現状だ。今後は高齢化が進む中で、高齢者の孤独、寂しさという問題を解決し、高齢者が外部の社会環境と密接な関係を保っていく、また新しく作っていけるような仕組みが必要であり、コミュニティの創出が望まれることであろう。

2. 研究目的

世界で最も高齢化が進む社会情勢の中で、文部科学省が推進する総合型地域スポーツクラブが日本の高齢化問題に対し、運動を行うことによる健康増進の観点や年代を問わずにスポーツをすることが出来る生涯スポーツ社会実現への環境整備はもちろんのこと、身近な地域で様々な年代の方との関わりを持つことにより生まれるコミュニティ機能の面からも特別な役割を果たすことができると考えられる。

スポーツに当てる余暇時間獲得の障害となるものは他の娯楽であることを鑑みた上でスポーツ系活動と文化系活動の併存し、相互に活動者に好影響を与えることができる空間が待ち望まれるところである。

そこで本研究では総合型地域スポーツクラブにおいて、スポーツ系種目と文化系種目に参加している高齢の方に対し生きがい感の調査を行い、比較することにより、今後の高齢化問題と総合型地域スポーツクラブのコミュニティとしての方向性を検討することを目的とする。

3. 研究方法

東京都杉並区に所在する向陽スポーツ文化クラブにてスポーツ系種目、文化系種目の参加者に対し「性別」、「年齢」、「参加種目」、「クラブへの参加頻度」、「クラブでの活動年数」、「クラブへの交通手段」、「クラブへの所要時間」の 7 つの項目と生きがい感を計るための「自己実現と意欲」因子、「生活充実感」因子、「生きる意欲」因子、「存在感」因子からなる調査項目 16 項目、計 23 項目によるアンケートを配布して調査を行った。アンケート配布回収期間は平成 23 年 11 月 11 日～18 日、配布数は 137 部、回収率は 100%であった。

分析では「高齢者向け生きがい感スケール (K-1 式) の作成および生きがい感の定義」を引用使用し、個別に「自己実現と意欲」因子、「生活充実感」因子、「生きる意欲」因子、「存在感」因子を得点化した。

最終的には個別に得点化した 4 因子の合計と参加種目で分類したスポーツ系種目、文化系種目との関係を割り出した。

4. 結果

今回「自己実現と意欲」因子、「生活充実感」因子、「生きる意欲」因子、「存在感」因子の 4 つの生きがい感調査項目と、スポーツ系種目、文化系種目の差の関係において有意差を示すことはなかった。

5. まとめ

運動をして身体を動かすスポーツ系種目も文化系種目も共に他者との関係、目的意識を持ち自発的に参加する気持ちには差異はなく、同じように生きがい感の向上に役立つもののと推測される。世の中には激しい運動行為が出来ない方、障害を持っている方等、身体を自由に動かすスポーツ系種目に参加したくても出来ない方も数多く存在するだろう。総合型地域スポーツクラブの今後はスポーツ系種目、文化系種目をともに「遊び」ととらえ、遊びの空間として様々な年代の方が集まるコミュニティとして発展していくと考えられる。